sprash!!

reina!!!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｐｒａｓｈ！！

【Ｎコード】
Ｎ８５４０Ｅ

【作者名】
ｒｅｉｎａ！！！

【あらすじ】
青波一中、二年生ピッチャー普の物語。

夏空

夏がやってきた。

荒木普は青く広がる夏空を見上げながら、ため息をついた。

（もう、疲れたな・・・。）

そう心の中で呟く。中学二年生の普は野球部に所属していた。背番号1を一年生の新人戦から背負ってから、チームのエースとしてなかなかの成績を収めていた。新人戦県3位、春季大会県優勝の勝ち投手だった普は絶大な自信と勇気を持って中体連ー三年生にとって最後の大会に臨んだ。

どの中学も、もちろん普たち青波第一中のナインも青波一中が全国大会に進むことを予感していた。

それ位普たちは強かった。

ところが県大会決勝で、青波一中は敗れた。

相手は春季大会の二回戦で5対2のスコアで勝った中野原中。

七回表、一点を守り切らなければならない大事な場面で、普は大炎上した。

相手チームに三点を返上してしまったのだ。

出会い

「気にすんな。ありがとな、お前これからも頑張れよ。」
先輩達はそういって引退していった。

普は何も言えなかった。
（俺が悪いんだ・・・。）

ノーアウト、フォアボールでのランナー。

これがきっかけだった。
相手チームの打線が爆発。

盛り上がる中野原の三塁側スタンド、
泣き出す青波一中の一塁側スタンド。

先輩たちの夏は終わった。

それから普はスランプに陥ったのだ。

ストライクが決まらない、
フォアボールばかり出す、
打たれてしまうストレート…

マウンドの上の普にあの大炎上の記憶がよみがえる。

「普、不調か？」

チームメイトや監督にも気付かれていた。

（もうだめだ・・・。）

（投げられない。）

普の苦痛は日に日に大きくなっていった。

そんな時、普に転機が訪れた。

青波一中に新しい監督が来たのだ。

その監督は、放課後の部活の時に初めて普たちの前に姿を見せた。

四十代後半と思われるその男は、上下ジャージに野球のスパイクをはいていた。

白髪交じりの短髪に青波一中の古い汚れた野球帽をかぶっていた。

その日、普はいつもどうり投げ込みをしていた。

まだあの日から気持ちが切り替えられていなかった。

相棒の背番号二、伊藤一史が声をかける。

「普ー！！まだストライクきてねぇぞ！！落ち着いて投げろよー！

！」
解ってる。解ってるけどうまく投げられないんだ…。
「もう一発なげてみぃー！！」
一史はそう言って返球してきた。
「あいよー！！」
普がそう言って投げようとしたその時、

「お前、名前は？」

その男が声をかけてきたのだ。

「荒木普。」

普は少しむっとして言い返した。
練習の最中に余計な事を言ってこられるのは誰であろうと大嫌いだった。
そんな普にお構いなしに男は言った。

「お前、今スランプだろう？」

はっとして前を向いた普に男は笑いかけた。

「もっと力抜いて投げろ。肩がガチガチだぞ。」

普は一史に向って投げ込みを再開した。
（力を抜いて、力を抜いて・・・。）
パシンッという心地よい音と共に、ボールがミットに収まった。

それを見て男は
「いいぞ。お前はいいピッチャーだ。自信もて。」

そう言って去って行った。

茫然と立っている普とは裏腹に、一史はこの時気付いていた。

「あの男、きっとタダ者じゃねぇな。」

start

一史の予感は当たっていた。

青波一中に現れた新任の監督―鈴木は青波一中のＯＢだった。
古い青波一中の野球帽をかぶっていたいた訳がわかる。
三十五年前、青波一中に全国優勝の赤旗をもたらしたエースピッチャーだったという。
監督―といっても今は前監督にあたる宇井先生は鈴木のことを『最強のピッチャーだった。』と言っていた。
鈴木は一見唯の中年の男だったがその瞳には、強い光が宿っているのを一史は感じていたのだ。

帰り道、一史は空を見上げながら、何気なく言った。
「なあ、普。」
「ああん？」
「今日、いいピッチングしてたぞ。」
「・・・うん。」
「明日からもこの調子だぜ。」
「おう。」
普は口数が少ないほうではない。むしろ教室ではぎゃあぎゃあ騒いでいるタイプだ。
なのに、今日の普は何かがおかしい。
「あの男・・・。鈴木だっけか？」
一史は横目で普を見ながら続ける。
「なんか俺、感じるんだよな。」
「何をだよ。」
やっと普が反応する。
「なんかあの鈴木ってやつについていけば、俺ら、いけるような気

がする。」
「どこに？」
「全国。」
一史が立ち止まる。普も二、三歩歩いてからつられて立ち止まった。
真剣な目で見つめてくる一史の視線をかわそうとしながら顔を伏せる普。
「なぁ、普。いけるよ、俺たち。」
一史の言葉と鈴木の顔が浮かぶ。
そしてあの大炎上の記憶も・・・
「やめろよ！」
思わず普は叫んでいた。
ビクッとして仰け反る一史に普は強い口調で続ける。
「俺は、俺はもう無理なんだよっ！
投げても投げてもだめなんだ。
ストライクが入らない。
マウンドに立つと県大会の決勝の記憶がよみがえって…
腕に力が入らないんだ！」
「普。」
「あの時だって、一史は絶対大丈夫だから四番の牧原の時ストレートを投げろって言ったのに
俺は、打たれるのが怖くて、一史のサインを無視してフォアボールにしたから」
「普っ。」
「あの時素直に一史のいう通りにしとけば優勝を逃さなくて、先輩たちと今頃」
「普っ！」
「だって・・・。」
「あの時だって普はいいボール投げてた！負けたのは普のせいだけじゃないんだよっ！
先輩たちだって『ありがとう』って言ってただろっ！」

「でも、もう自分に自信が持てないんだよ。・・・ごめんな、一史。」

「泣いてたな、普。」

走り去っていく普の後ろ姿を見ながら、一史は深いため息をついた。夕焼けが西の空をオレンジ色に染め、街を生暖かい風が吹き抜けていった。

次の日、一史が学校に行くと隣の席の石川唯が声をかけてきた。

「おはよー。」

「おう！」

「ねぇ、昨日野球部に変なオジサンがきたんだって？」

「変なオジサン？」

少し考えると、鈴木の顔が浮かんだ。

「あぁ！鈴木？」

「そうそうそれそれ！その人私たちの学年の体育主任になるらしいよ。」

「まじかよっ！？」

思わず石川の肩を掴んでいた。

「痛い痛いっ！ホントだってばぁ！だって偶然職員室の前通りかかった時にきこえたんだって。」

「そうだ！普に報告してこよーっと！！」

一史は二年三組、普は二年二組だった。

そう言って教室を飛び出しかけた一史の足がぴたりと止まった。
（俺、何やってんだ…。）
昨日から普のケータイに電話もメールも繋がらなくなっていた。
ずっと一緒にいた幼馴染だからといって、鈴木がいれば全国に行けるなんてことを言って普のプライドを傷つけた罪は重いのだ。
普は相当怒っている。

幼馴染がスランプに陥っているというのに、俺はなんて自分勝手で無神経なことを言ったんだ。そう自分で自分を責める。
鈴木がいても誰がいなくても、全国に行けるか行けないかは普や俺たち野球部の実力次第なんだ。普は自分の実力と理想の野球の間で悩み、もがいていたのに一史は鈴木がいるから全国に行けるかもという一言で片付けようとした。
（あぁ俺、馬鹿なことしたのかな。いや、したんだな。）

席に戻ろうとした一史に後ろから普の声がした。
「おい！一史！聞いたか！鈴木が俺らの体育の主任って！おいっ・・・・一史？お前・・・。」
次の言葉をかけようとした普は固まった。
「一史、お前どしたん？」
見ると一史は涙を浮かべて立っていた。
「あーもう！目にゴミが入った！普、おまえのせいだ！」
一史は泣き笑いのような表情になった。普は笑った。
「昨日ごめんな。一史に図星言われてちょっと戸惑っただけだから。全国、目指そうぜ！」
一史はもう我慢の限界だった。両目から溢れてくる涙を見て同じク

ラスの福井が叫んだ。
「いやー！！カズちゃん、メッチャかわいいわー！！」
どっとクラスが笑いに包まれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8540e/

sprash!!

2010年10月17日14時58分発行